

## 5.5. 優秀演題 発表7

### INREAL アプローチと場面設定により自発表出が増加した症例

言語聴覚士学科

#### 【はじめに】

今回、言語コミュニケーション面に遅れをもつ5歳男児を担当する機会を得た。INREALアプローチと場面設定によって計8回の個別訓練で自発表出が増加し、同時に認知レベルも向上した症例を報告する。

#### 【症例紹介】

5歳男児。主訴は、伝えたいことが増えてきたが、語彙数が少ないためうまく伝えられない。医学的診断名は無し。聴力の問題無し。新版K式発達検査(CA4歳2ヵ月時)全領域：2歳0ヵ月。集団参加は保育園。

初期評価による言語評価では、3-5語文程度の理解があり、自発表出は1-3語文可能であったが、要求はジェスチャーで伝えることが多かった。

#### 【訓練計画】

主訴と保育園で友達とのやりとりが少ないということから、「○○かして」の自発表出を短期目標にした。長期目標は、場面に応じた適切なことばを自発的に表出できるとした。本児が好きなボール遊びを毎回の訓練で設定し、「ボールかして」の表出を獲得しやすいようにした。まず「かして」の理解の有無を確認した(第1・2回)。つぎに、INREALアプローチの言語心理学的技法<sup>1)</sup>を用いて、自発的な表出に向けての促しの方法を統一して訓練を行った(第3～第7回)。具体的には、①無理やりボールを取ろうとした場面で「なんて言うの」と声かけを行う、自発表出がでない場合②「貸してと言って」と復唱を促す、③自発表出、復唱どちらでも表出ができたらずぐに褒めるという順番で行うこととした。

#### 【訓練経過・結果】

表1. 「ボールかして」までの自発獲得経過

訓練回数	「かして」の表出
1回目	復唱による表出ができた
2回目	促しによる表出ができた
3回目	復唱の後、自発的に表出できた(23回)
4回目～	自発的に表出ができた
訓練回数	「ボールかして」の表出
7回目	復唱の後、自発表出ができた(18回)
8回目	自発表出ができた(9回)

表1の通り、7回目で「ボールかして」の自発表出が

可能になり、短期目標を達成できた。同様の方法を用いて長期目標の達成も可能となった。

#### 【考察】

INREALアプローチを用いたこと、また段階的な促しと褒めによる成功体験により自己肯定感を高め、更なる表出意欲を促せたと考える。佐竹<sup>2)</sup>は、子どもが発話する機会を多くするような環境条件を整え、発話で要求するのを待つこと、その際発話がない場合は、大人が適切な発話を促すこと、手本を示すこと、適切な発話がなされた場合は子どもが要求したものをすぐに提供すると述べている。このように、スクリプトが設定できる遊びの場面を設定し、楽しさを共有しながら表出を促したことが、語用論の向上に繋がり、本児の認知レベルの発達をも促進したと考える。

#### 【まとめ】

今回、INREALアプローチと場面設定で段階的に自発表出を促し自己肯定感を伸ばしたことで表出意欲を高めた。これにより、短期目標が達成できた。保護者から、保育園や家庭でも「かして」の表出ができていたと聞いた。般化が可能になったと考える。

今後の課題として、他者とのやりとり遊びを中心に、言語理解レベルに相応の表出(動詞や形容詞)を増やしていくことが挙げられる。また、場面を構造化することによって指導者の意図する行為やことばの表出を獲得しやすい状況をつくり、あらゆる場面において適切な言葉が表出できるよう、発達にに合わせて段階的に目標を設定していくことが重要である。<sup>3)</sup>

#### 【参考・引用文献】

- 1) 竹田契一, 里見恵子: 子どもの豊かなコミュニケーションを築く インリアル・アプローチ. 日本文化科学社. 東京, 1994, 7-22.
- 2) 佐竹真次: スクリプトによるコミュニケーション指導. 川島書店. 埼玉, 1998, 9.
- 3) 佐竹真次: スクリプトによる社会的スキル発達支援. 川島書店. 埼玉, 1998, 73-95.
- 4) 木村順: 育てにくい子にはわけがある. 大月書店. 東京, 2006, 142-151.